

---

# 夏の終わりに

葵夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏の終わりに

### 【Nコード】

N8096U

### 【作者名】

葵夜

### 【あらすじ】

夏祭りの夜。

悠と秋姫は砂浜で花火があがるのを待っていた。

誰もいない砂浜で。

花火は一瞬の輝きのためにこの世に生まれてくる。

だけどそれは無常にも散ってしまい、その後何も残らない。

夜の砂浜には静かな波の音しか聞こえていなかった。

俺は近くにあった流木に腰を下ろす。片手に持っていたアイスコーピーを飲みながら海岸を歩く一人の少女を見つめる。

俺と秋姫しかない海岸に沈黙が訪れる。しかしその沈黙は気まずいものではなかった。寧ろ落ち着いている。俺はただ、何も考えずに秋姫を見ていた。

「こつちまで来ると静かだね」

夏祭りの会場から少し離れた海岸。午後九時頃から花火大会までにはまだ三分ほどの時間があつた。ぼつらぼつらと漁港に人の姿が見えてきたが、俺たちがいる砂浜には誰も来なかった。

月光で輝いて見える秋姫は海風に髪を靡かれていた。秋姫は静かな海を見ながら、また口を開く。

「悠は……花火好き？」

唐突の質問だな。

「嫌いじゃない。誰でも綺麗で美しい物は好きはずだ」

コーピーをもう一度啜る。秋姫はそのまま海を見つめながら黙りこくってしまう。

俺は今、何をすればいいのだろうか。秋姫は今、何をしたいのだろうか。

ただただ、ザーザーという波の音を聞いているだけ。特に何をしている訳でもない。時間だけがゆつくりと、そして確実に過ぎてゆく。俺は秋姫という時間を楽しめばいいのだろうか。ただでさえ勉強で忙しい高校生活でこんな落ち着ける時間は少ない。そして何よりも秋姫という存在が近くにいることが俺の心の疲れを取ってくれた。

「私は……」

またも沈黙を破つたのは秋姫。今度は俺の方を振り向いていた。

月光のせいかな俺からは秋姫の表情がよく見えない。雲一つない夜の星空が満月の光をそのまま地上へと降り注がせていた。

「今、何を考えているんだろう」

どう答えればいいのだろうか。そんなこと俺にはわかるはずがなかった。表情すら見えないのだから検討も付かない。そしてこの質問の意味すら俺にはわからなかった。

「もう少しで花火が上がるね」

腕時計を見るとすでに九時に近かった。途端に漁港の方が騒がしくなっていることに気づく。俺の耳には秋姫の声しか入っていないなかったのだ。

しかし、さっきの質問が気になった。話題をすぐに逸らしたけれども、それは応えて欲しかった問いだったのだろう。未だにわからない俺は質問応えることができなかった。

「悠」

「なんだ？」

秋姫の問いかけと同時に花火が上がる音がした。一つの光の筋が上へ上へと上がっているのがわかる。

そして花火は満開の花を咲かせ、無常にもすぐに散ってしまう。

かと思った。

しかし満開の花は咲き続けたまま、空に浮いている。消える様子がまったくない。

「花火と私は同じ」

波の音も、人の声も、風の音も、何も聞こえない空間に俺はいた。全ての時が止まっているようだった。だが秋姫と俺だけがこの空間の中、動いている。不気味な静けさは俺たちを包み込んで、まるで何もかもを消してしまう闇のような感じがした。

「花を開いてもすぐに散ってしまう」

月光は相変わらず秋姫を照らして、表情がやはりわからなかった。「私ももうすぐ散る」

この何もかもが止まった世界が一体何なんだ。訳がわからなくなる。俺は今の状況、そして秋姫の言葉、何一つとして理解できなかった。

秋姫は俺の方を見続ける。俺からは今なお咲き続ける花火の光と冷たく青光りする月の逆光によってあいつの表情が見えない。

さっきまで静かだった海が今の俺には“くろいなにか”にしか見えなかった。

さっきまで星で光り輝いていた夜空が今の俺には“くろいなにか”にしか見えなかった。

さっきまで賑やかになっていた空気が今の俺には“くろいなにか”にしか見えなかった。

頭が痛くなる。訳の分からない恐怖が俺の心の中で蠢いている。

ただ“くろいなにか”は俺たちを包み込んでいる。それから逃れることはできない。本能がそう呼びかけていた。生き物は暗闇を恐れるというがまさにこれがそう。恐れる、という言葉では表現しきれない。悪魔が落ちてきた、という感じなのか。

未だ何も起こってはいないけれどゆっくりと、そして確実に俺と秋姫は何かに直面する。俺自身、よくわからない。ただこの世界が俺に感じさせ、本能に呼びかける。

ほんと……訳が分からない。

「花火は夏祭りに上がる。そして夏祭りは夏の終わりを知らせる。

夏祭りの最後には花火が上がる。花火が終わったら夏の終わり」

夏が終わる。秋が来る。そして冬が巡り春になる。

俺は夏が好きだ。だからこの季節が終わることが少し残念にいつも思う。しかし今は違った。ただ残念に思うだけじゃない。何故だろう。“後悔”がある。俺自身、まったくわからないけれども“後悔”は確かに俺の中にいた。そして秋姫は言った。

「今年の夏が終われば私は故郷へと帰る」

「季節の移り変わりを止めることはできない」

「花火と共にこの世から消え行く運命」

「この世界は楽しかった」

秋……姫………？

「悠と出会った」

そうか。

「私はただそれだけで嬉しかった」

神の悪戯なのか。

「秋 姫……、秋の姫は季節に帰る。私は人間の姿をしているだけ。私は秋にいる姫。人間に秋を探すことはできない。何故ならこの世界に存在しないから。それは冬も春も夏も一緒。この世界には存在

しない」

神は俺を翻弄しているのか。

俺は一人だったのか。

運命が決めたのか。

「私は花火が終われば消えてゆく。それは誰にも止めることはできないし誰も気付かない。私がいた、ということ自体がなくなっただけ誰も私のことを覚えていない」

“そう、悠も”

俺の体の中に、“そう、悠も”という声が響き渡った。

俺がお前を忘れる……？ この十六年の人生でお前と過ごしていた十二年のことを？ 俺が一目ぼれした相手を？ 俺の大切な人を？  
「……………」

だけど俺には「忘れないさ」と答えることができなかった。俺にはまだ、全てが“くろいなにか”にしか見えていない。何もかもが俺を軽蔑したような目で見ている気がしてならない。俺と秋姫しかないはずなのに、この痛々しい視線は俺へと容赦なく突き刺さり続ける。

そして感じるのが“孤独”。誰も俺の味方などいなかった。人でもない、物でもない、ただ漠然とした理解できない存在が俺を突き放している。

神様なのか、悪魔なのか。

誰の仕業なのか。

訳が分からなくなる、と思ったのは一体何回目だ。訳の分からない恐怖、そして後悔。何故そんなものを感じているのかすら理解で

きない。

いや、もしかしたら理解するものじゃないのか。理解したらダメなのか。俺は理解することを恐れているのか。理解したら全てを失ってしまうと思っているのか。

満月を見上げてても冷たく真っ黒に光る目玉にしか見えない。さっきまで青光りしていたはずなのに、何もかもが黒く見えている。

「悠」

瞬間、何かが爆発した音がした。それと同時に歓声が一気に上がる。ずっと満開の花を咲き続けていた花火が静かに真っ暗な星空へと消えていった。

時が動き出していた。しかし俺にはまだ“くろいなにか”が全てを覆っているようだ。秋姫は花火が消えていくのを見上げて俺の方を振り向く。

「花火は一瞬の輝きのためにある。そしてその役目を終わったら静かに、ゆっくりと消えて何もかもがなくなる。私もこの十六年という輝きのためにここまで来た。一人前になるまでこの世界で生きることを許され、この世界を楽しんだ。悠と出会った。色々な人々に出会った。そして私は数多のことを教えてもらった。でも私はこうやって帰らなければならぬ。みんな忘れる。誰も覚えていない。何も残らない。ただ消えていく。花火と共に」

花火は連続で上がっていることに気がつく。その一つ一つの輝きは俺には砂時計のように刻々と時間を告げているように見えていた。静かな波の音も今になっては聞こえない。

時間がなかった。

この花火が全て終われば秋姫はいなくなってしまう。そう理解した。俺の中にいる後悔の意味は一つ。きつとどこかの俺はこいつに告げられなかった。本当に言わなければならぬことを。そんな感



じがする。違う俺が今の俺に言っているんだ。二度と同じ俺が出てこないようにしているんだ。  
ゆっくりと深呼吸をする。

「……秋姫」

月も海も空も風も空気も花火も。

俺には“くろいなにか”にしか見えない。だけど徐々にそれが変わりつつあることがわかった。このままじゃいけない。このままじゃ全てを失う。このままじゃ何も残らない。

俺は自分に言い聞かせる。鉛のように重い唇を開けるにあたって障壁が立ちほだかっていた。全身が震え、悪寒が襲い、鳥肌が騒ぎ立てる。暗闇の壁、恐怖の壁、孤独の壁、後悔の壁。

だが俺にはそんなもの意味がない。

震え？ 悪寒？ 鳥肌？ 暗闇？ 恐怖？ 孤独？ 後悔？  
知るか。

「好きだ」

これが秋姫に対して最後に言える言葉だった。

花火は未だに上がり続けている。時間は少しだけ残っていた。今までの気持ちを伝えたのだから、後は秋姫の返事だ。

しかし花火の爆音だけが俺たちの間に響き渡り、暗闇の中、秋姫は俺のことを見つめているまま。やっぱり表情は見えない。何を考えているのか、何がしたいのかもやはりわからなかった。

「こんな……もういなくなっちゃう私に何でそんな言葉を伝えるの……？」

質問の答えはすぐにわかった。

「好きだからだ」

簡単じゃないか。これ以上の理由などない。いなくなるからこそ、伝える。この会話が全て闇の中に消えてしまっても構わない。この瞬間だけ感じればいい。後のことなんて知らない。

構うものか。誰にも止めることはできない。どんな障壁が立ち塞がっても俺は走り続ける。誰が来ても負ける気がしない。止められる気がしない。絶対的自信が俺を満たしている。俺じゃない俺が感じた後悔が今の俺の中にある。それが今の俺の言動に自信を持たしていた。自分でもよくわからないさ。これが正しいかどうかなんて「そんなこと……」

冷たく青光りする月に雲がかかってきていた。徐々に月光は弱まり、逆光が消えてゆく。

俺は見つけた。

### 秋姫の涙を

「そんなこと言ったらただ別れが辛くなるだけだよッ！……」

しっかりと表情が見えていた。そして泣いている。涙が花火が上がるたびに輝いていた。一つ一つ、雨粒のようにゆっくりと落ちてゆく。重力に従ってゆっくりと。

『辛くなるだけ』つか……。

「伝えなくても別れは辛いさ」

正直、俺も何をしたいのかわからないさ。でもどんな理不尽な世界であっても俺は立ち向かい続ける。世界を変えてみせる。変えなければいけない。俺が秋姫を好きでいるには。

「だがな、俺はその別れの辛さ以上にお前と出会えた奇跡の方がよかったと思えた。出会って一二年間、こんな幸せな時間はもう二度

と送れないかもしれない。俺が本当に好きな人が近くにいるということがどんなことよりも幸せだ。どんな苦痛を受けようとも、お前と出会えたこと、一緒にいられたことが幸せだ。だからな……」

ほんと……わけ分かんねえ……。

「いかないでくれよオオオ！！！」

涙腺が一気に込みあがってきた。こんなこと言っても何も変わらないことはわかっていた。俺にはどうすることもできない。

幸せだった。この幸せが一生続けばいいと思った。

だけど運命はその通りにはならなかった。

……。

「悠……悠ッ……悠！　悠！！　うう……うわあああああああああ  
あ」

秋姫は俺に手を伸ばした。だけどこんなに距離が離れているんだ、届くわけがない。俺たちの運命は最初からこうだったのかな。こうやって一緒にいることできなかったのかな。誰にも変えることはできなかったのかな。

ただただ涙が出てくるだけ。

「さあ！　花火大会も残り一発で終了となります！！！」

アナウンスの声が俺たちの耳に入ってくる。砂時計に残っている砂はもうほとんどなかった。

もう俺たちは何もすることができないのか。

顔が歪む。視界も歪む。涙が滲む。

「秋姫……」

「……最後に……ッ……私のこと………忘れないでね」

花火が上がった。ヒューという高い音を立てて。  
そして

満開の花を咲かす。

「秋姫ッ……」

海岸には誰もいない。

ただ俺一人が呆然と立ち尽くしていた。そして体の中に残っているのは訳の分からない後悔だけ。

今、俺の眼から涙が流れている理由がわからなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8096u/>

---

夏の終わりに

2011年10月9日11時47分発行